

— いつかギャラリーをやろう、やってみたいと以前から思っていたのではないのですか。

宇津 全然なかったです。ここに来るのがきっかけだったんです。だから本当だったら、どこかのギャラリーで、二年でも三年でも勉強してからって思うんですけど。美術が好きっていうだけではできないことだったんだあって、始めてから分かったから(笑)。

いろんなギャラリーに行っては、概要とか規約みたいなのをもらってきて、それを読んで、こういうふうになってるんだ、だいたい決まってることがあるんだあって分かったんですよ。あと友達に作家さんがいたので、そのひとに、ギャラリーはどんなふうにしたらいいのかを聞いたりしました。

— ここを利用される方は、どのような方が多いのですか。

宇津 作家さんもちろんいますけど、女の方、主婦の方が多いですね。わたし最近思うんですけど、主婦は馬鹿にできないな、と。

去年ここでやった方は、お洋服を作ってるんですけど、すごく熱心なんですね。例えばすごいお洋服があったとするでしょう、それが何万円でもそのひとは買うんです。そしてそれをほどく。どんなふうに作ってあるのか見て、同じものを作ってみる。わたし感心させられますね、ああいう方には。苦労しながら努力してるんじゃないんですよ、好きだからどんどんやるの。それがね、すばらしいと思う。

— 探究心がすごい。そういう方がいらっしゃるんですね。

宇津 いますね。だから絶対主婦はあなどれないと思います。子供を育てながらこつこつやってるひともいます。だからわたしそういうひとにやってもらいたいと思うの。最初は、大丈夫なのかな、売れるのかなとかちよっと思ったりして、契約をするわけじゃないですか。でもやってみて、何日も一緒にいると、そのひとの今までやってきたこととかをお話することがあるわけじゃないですか。そうするとね、ますますそのひとのすごさが分かるの。

それで、お客さんが来て買う。買うっていう行為がすごいと思うんですよ。ただ作ったって、どこにでもあるものだったら買ってもらえないと思うんです。でもすてきだわって買うお客さんがいるっていうことが、ギャラリーが成り立つってことなんですよ。だからそういうひとを見つけていかなきゃいけないと思うんです。

— お客さんは、どこから情報を得てここへ来るんでしょう。

宇津 わたしは、うちに来たお客さんにはなるべく芳名帳に書いていただいて、名簿にするんです。例えば布系のときに来た方って、いつも布系とか繊維系には来るんですね。だからそういう方を、わたしがその都度選ぶんです。このひとだったら来るかなあとか。それでDMを出すんです。そうするとかなりのひとが来てくれますよ。でも外れることもあるんですよ。来ないなあと思うときもあるんですけど(笑)。それから新聞にも出しますし、他のギャラリーにDMを置いてもらったりもしますし、それを見て来る方もいます。やっぱり、みなさんに来ていただく努力もしなくちゃいけないと思うんですよ。ただやっても来ませんよね。

— 企画展もされていらっしゃるそうですね。

宇津 もちろん、年に二三回はうちの全面企画でやりますけれども、それはわたしが作家さんに直接お願いにあって、やっていただくんです。最初はどきどきしながら行きましたが、今も最初にお会いするときはどきどきしますが、あんたのギャラリーなんかじゃやらないよ、とか言われちゃうかも知れないと思いながら(笑)。

● <左写真>Nobu's Gallery & Café 入口



● 芳名帳など置いてあるテーブル

— 過去にはどういう企画展をやったんですか？

宇津 うちの夫のギターのお客さんに、このギャラリーでやってもらうっていう企画をしたことがあるんです。「ギターに魂を貫かれた男たちの仕事展」っていうんですけど。そのときは、ギター好きのお客さんで、あまり美術に興味のないひとも見に来ましたね。

— おもしろい！それは Nobu's Gallery でしかできないことですね。

宇津 それは楽しかったですね、けっこう。全面企画ですから、写真もうちで撮りますし、DMもうちで作りますし、全部うちでやります。だから賭けみたいなものですよ。でもまあいいんです、それは自分でいいと思ってやるんだから、覚悟してやるんですけれども。でもお客さんはけっこう来てくれます。うちで全面企画したもので、失敗したのってあんまりないですね。

— 貸しギャラリーだからって、ただ場所をお貸しします、というわけではないんですね。お仕事もたくさんあって大変ではないですか。



● ギャラリー内部

宇津 でもギャラリーでひとを雇うっていうのは本当に大変だと思いますよ。自分でこれから始めようっていうひとは、ひとを使わず自分でやる努力をしないと、やっていけないと思いますね。考えてみれば、始めて一二年のときにね、すごく怖くなったの。ギャラリーのノウハウも、芸術とは何かということも分からないのに、わたしってとんでもないことを始めちゃったって。やってもらってても、どうしよう失敗したら、とかね。

— そうですね、自分ひとりでやるわけじゃないですから。作家さんのためにもお客さんを呼ばなきゃいけないし。

宇津 そうです。自分さえよければいいってわけじゃないじゃないですか。作家さんはそれで食べてるひともいるじゃないかって思ったら、少しどきどきしてきちゃったの。

だから本当にギャラリーは儲からない仕事です(笑)。資本のあるひとだったらやっていけるかもしれないけど、それでなんとか生計を立てていこうっていうひとには、ちょっと無理だと思いますね。うちは幸い夫のギター工房がメインですから。でもここに来たときうちの夫に、自分の食い扶持は自分で稼げて言われたんですよ(笑)。だからわたしは今までしていたパートの収入分くらいは自分で稼がなくちゃいけない、というのはあったんですけど。

— それでもギャラリーを続けるのはやっぱり自分の好きな作家さん、すばらしい作家さんにやってもらいたいっていう。

宇津 そう。自分の好きな方にやってもらって、それを成功させる。お客さんに来てもらって、お客さんに楽しんでもらう。それである程度売り上げも上げることができる。それがわたしの目標なんですよ。

— お話を聞いて、銀座などのギャラリーとはちがった Nobu's Gallery の特色があるのだと思いました。

宇津 そうなんです。ここに東京と同じものをもってきたとしても、それは不可能なわけですから。自分がここでギャラリーをやるっていうことはどういうことなのか、やっぱり一年二年やっていくうちに、ひとが何と言っても、自分のポリシーを曲げないっていうことが大事なのかなあと思いましたね。

— 宇津さんのそのポリシーや芸術を見る目がこのギャラリーの大きな魅力になっているのだと感じました。Nobu's Gallery には、ここにしかない新しい作品との出会いがありそうです。どうもありがとうございました。

● 宇津伸さん

